# テーマ報告　1998年

**テーマ報告「アーバンフリンジのランドスケープを考える」**

第１部「景観づくり」　司会：中井和子

大都市圏のアーバンフリンジにおける環境共生型の都市構造にかかわる考察

　　太田清澄（（社）北海道都市再開発促進協会）

　アーバンフリンジのランドスケープを計画するに当たっては、都市計画分野における今日的課題のひとつとして環境共生型の都市開発へのシフトを支える論理的組立が求められている点が切り口のひとつとして考えられる。

　しかし、一方においてランドスケープ計画のディテール的論理展開の前に、希求しようと試みる今日的課題をテーマとした都市開発を具体化するためには事業運営計画面で大きなが隘路あり、この隘路によりシフトチェンジの切り方により大きく二つのステージが創出される可能性があり、さらにはそれぞれのステージにより当然のごとく創出（形成）されるランドスケープ＜景観＞は大きく異なることを理解・認識する視点が重要である。

モエレ沼公園造成事業について

　　石村寛人（札幌市環境局緑化推進部造園課）

　札幌市では、都市縁辺部にイサム・ノグチ氏基本設計のモエレ沼公園を、造成中である。モエレ沼は、札幌市の北東約９kmに位置し、豊平川の河跡湖で不燃物ゴミの埋立が行われていた場所である。イサム・ノグチ氏の基本設計に基づき、全体を彫刻としてとらえ、ダイナミックな地形造成を行っている。全体の完成は平成16年を予定しているが、既に多くの人々が詰めかけ、交通対策や施設整備などの改善や、ソフト面での運用の方法を模索中である。

農地・農村の景観と都市との交流

　　野本健（（財）北海道農業近代化コンサルタント）

　北海道における農地・農村の景観・空間の形成過程および今後の地域生態系としての展開方向について示すとともに、都市周緑部における農地の計画的配置、景観、資源の位置づけの必要性を示した。

第２部「みどりづくり」司会：小林昭裕

沖積低地に成立する植物群落の分布と生育地特性

　　並川寛司（北海道教育大学札幌校生物学教室）

　札幌周辺の沖積低地の原植生は、湿原や河川周辺の草原と、ハンノキなどを主体とする湿生林である。前者の代表として茨戸川氾濫原の草原を、後者の代表として野幌自然休養林内の湿生林を取り上げ、構成群落あるいは構成種の分布とそれを支配している要因を解析した。茨戸川氾濫原はヨシを中心とする群落で、ヨシ以外の種の出現から５つの群落が区分され、これらの群型の分布は平均水位と密接な関係を示したが、水位変動の程度とは独立であった。野幌自然休養林の湿生林は、ハンノキ、ヤチダモ、ハルニレから構成されており、相対的に最も低いところにハンノキ、最も高いところにハルニレ、その中間にヤチダモが偏って分布する傾向を示した。

植栽基盤整備の方向性について

　　田中寛（（株）ライヴ環境計画）

　緑地の拡張及びその質的向上を考えるとき、その基礎となる植栽基盤の整備が重要な課題となる。しかし、その方法などについては、技術的な確立を見ていない。ここでは、植物根系と土壌の構成やそこに内在する水分、空気の関わり、降水量の分布がこれらに及ぼす影響を示すことによって、植栽基盤整備方法を技術的に確立するためには、土壌孔隙に着目する必要のあることについて述べた。さらに、既存緑地を対象に、これまで用いられた整備方法や改良資材の効果について検証する必要のあることについても付言した。

札幌北部での植栽における風の影響

　　笠康三郎（日本データーサービス（株）緑地計画室）

　厳しい環境での植栽を計画する場合に最も大切なことは、周辺の既存樹木等の生育状態から、その地域の環境条件の特性と、植物の生育を支配する環境圧をいかに正確に把握するかにかかっている。札幌の北部に広がる体平地には、近年急速に施設の立地が進んでいるが、人の手によって土地条件が大きく改変された空間に対して潜在自然植生に頼れない新しい植栽環境をつくり出すことも重要な課題となっている。

　そこで、植栽に対する環境圧のうち、特に風に着目してその現状と植栽時に配慮したい対策等についていくつかの提案を行った。